

# 「文化都市」京都を築くためにも 心を整え町を整える強い意志を

2020年は東京五輪・パラリンピックが開催されるが、京都は文化都市としての格をさらに上げていくために本腰を入れていかなければならないだろう。ところで、われわれが「ああ、いかにも文化の香りのする町」と実感できる都市の姿はどのようなものだろうか。それは恐らく極めて身近な体験からも理解できる。仮に町に一歩足を踏み入れたらとしよう。そこでまたまた出会った子どもがいかにも礼儀正しく、尋ねたことにきちんと答えてくれた。あるいはたまたま乗ったタクシーの運転手さんがとても親切だった、となると、そこに住む人々のモラル教育が行き渡っていると感じる。空気も非常に綺麗な町となるとその都市が環境問題にとっても敏感に取り組んでいるのだ

# 琳派400年の年を迎え 「私淑」の伝統を現代に生かそう

今年には琳派400年の年といわれていますが、1615年に本阿弥光悦が家康から洛北「鷹ヶ峰」の地を与えられ、法華宗のユートピアである工芸村を開いてから400年なのです。400年前の1615年ほどのような年だったのか。大坂の役・夏の陣で徳川氏が豊臣氏を滅ぼした。関ヶ原の戦い(1600年)後も、豊臣秀頼は大坂城に住み、莫大な軍用金を持ち、徳川の

# 未来の人々に恥じないものを 作らなければならないと思う

昨年のこと。長次郎の茶碗二碗をガラス越しに見た。お茶碗の外側のラインや内側の削り具合、肌合いなど、そこには利休と長次郎からの密度の濃いメッセージがいっぱい詰まっているように、穴があくほど眺めていた。あるお家にお茶事に呼ばれたときには、江戸時代の美しい蒔絵が施された箸を手にとらせていただいた。その細かい蒔絵は緻密な一本一本の線に一分

# 「いただきます」「ごちそうさま」 感謝の気持ちがこもった尊い言葉

日本語にしかない「いただきます」と「ごちそうさま」のさりげない大切さを、いま一度考えてみるのはいかがでしょう。飽食の時代といわれる現在、あらゆる食材が全国各地から、いや、世界中から手軽に取り寄せられる時代となりました。稀少価値の物から高級な食材までいろんな手段で手に入ります。私は小学校に入学した年に終戦とな

## 佐々木永平

京都国立博物館館長



ろうと想像させる。さらに町並みがとても美しい、あるいは家々の窓や門前に綺麗な花の姿も垣間見られるとなると、都市計画がきちんとされていて住人の美しい町造りへの関心も高いのだろうと感じます。歴史遺産がきちんと整備され、美術館、博物館、音楽ホールや能楽堂といった文化施設も充実しているとなると、文化に対する意識も高いと感じる。そしてその都市の住民が自らの町に対してきちんとした誇りを持ち、華美ではないが物質的満足と精神的満足の程よいバランスの中で生活しているといった都市と住民の姿

## 佐藤 敬二

京都精華大学デザイン学部教授



化人が多く、一宗教勢力である浄土真宗・向宗と対立したといわれます。信長が石山本願寺と長年戦争をした状況を知っている家康は、法華宗を奨励し、一向宗の対抗勢力として育てたのではないのでしょうか。そのような中で、光悦や俵屋宗達(たわらやむねたけ)の富裕な町衆芸術ともいえる造形は、幕府御用達の狩野派とは別様の芸術活動として花開きます。狩野派には粉本といわれる手本があり、師匠から弟子に直伝される画風は、まだ見ぬ虎や架空の動物も描くことが出来ました。対して光琳派の人々はそれぞれ私淑(直接

## 諏訪蘇山

陶芸家



生き続ける。そんな人々が日本の美を支えてきたのだ。今は大量生産大量消費の時代。お店には物が溢れている。最近では早く壊れるように作られているのだとか。ショッピングセンターに大量の商品が置かれていてのを見ると、この品物たちはこの先どうなるのだろうと少し怖くなった。この品物たちが今の日本を支えているのだろうか。この豊かな時代は、戦後の貧しい時代を生きてきた私の両親の世代が、子どもたちに豊かな暮らしをさせられるようにと必死になって働いて築き上げてくれたのだと思う。もう十分に豊かになった今、未来に向けてどういう理想を掲げてこの国を造っていかねばいいのだろうか。

## 高橋英一

飄亭14代当主



食べ物に対する感謝の念は純粋だったと時折思い出します。今ではデパート下の食料品売場で欲しい物は何でも手に入り、また、コンビニなどでは、よくぞここまで安く出るとも思える弁当が出回っています。これらには全て賞味期限が定められ、少しでも過ぎると廃棄処分になるといふ、実にもったいない日常が現実です。自分たちの若いころは食べ物がいたんでいなかっただけで、自分の鼻で確かめ舌で判断したもので、賞味期限の言葉すら知らなかったと思います。「お正月」何と心地よい響きの言葉

## 「いただきます」

この何気なく使う日常の一言を深く考える日本人の持つ心の豊かさ、穏やかさがよく表れていると思います。おせち料理も今やデパートで買うものといわれるほど、数多くの料理屋の見本が並び、選り放題。天然物の食材が減少してきているこの時代に、一度食料品に思いを込めて、食後に合わせる手のひらに「ごちそうさま」と、素直な気持ちを再発見するのも小さな日本文化ではないでしょうか。なぜならばこのひと言は、日本語でしか言い表わせない感謝の気持ちがこもった尊い言葉なのだから。

常々未来への責任を感じていかなければならないし、未来の人々に恥じないようなものを作らなければならない。百年後、二百年後の人たちが、私の作品を手にとった時どう思うだろうか、何百年も大事にされてきた作品を見ながらそんなことを考えた。工業製品でも、美術品と呼ばれる物でも、貴重な地球の資源を消費している、言い換えれば、地球が育んだ命をいただき、新しい命を吹き込むのだから、その材料にもその作品の行く末にも、責任を持って物を作れているか常に問い続けたい。

この何気なく使う日常の一言を深く考える日本人の持つ心の豊かさ、穏やかさがよく表れていると思います。おせち料理も今やデパートで買うものといわれるほど、数多くの料理屋の見本が並び、選り放題。天然物の食材が減少してきているこの時代に、一度食料品に思いを込めて、食後に合わせる手のひらに「ごちそうさま」と、素直な気持ちを再発見するのも小さな日本文化ではないでしょうか。なぜならばこのひと言は、日本語でしか言い表わせない感謝の気持ちがこもった尊い言葉なのだから。



●たかはし・えいいち  
1939年、京都市生まれ。同志社大卒業後、東京、大阪の料理店で修業。64年、飄亭に戻り67年、14代主人を継承。京都料理研究会会長、全国芽生会連合会理事長、京都料理組合組合長、日本料理アカデミー会長を歴任。京名物百味会会長。著書に「飄亭の四季」「京都・飄亭・懐石の器とこころ」「飄亭の点心入門」「もてなしの美学 一句の器」など。



●すわ・そぞん  
1970年、京都市生まれ。父3代諏訪蘇山・母12代中村宗哲の三女。京都市立陶芸美術工芸高校漆芸科卒。成安女子短期大造形芸術科映像専攻卒。京都府立陶工高等専門学校造形科・研究科修了。京都市伝統産業技術者講習陶磁器コース修了。2002年、4代諏訪蘇山を襲名。04年から各地にて諏訪蘇山展を開催。



●さとう・けいじ  
1948年、京都市生まれ。京都市立芸大卒。京都市工業技術センター(現、産業技術研究所)研究部長を経て現職。意匠学会副会長。日本デザイン学会、民俗芸術学会、茶の湯文化学会、生活文化史学会などに所属。専門は伝統産業論、デザイン論、素材論、近代工芸史。伝統的工芸品産業産地委員、京都市伝統産業振興センター(ふれあい館)理事。



●ささき・じょうへい  
1941年、兵庫県生まれ。京都大大学院文学研究科博士課程修了。文学博士。京都府教育庁技官、文化庁調査官、京都大大学院文学研究科教授を経て、2005年4月より現職。主な著書に「古画秘鑑」「与謝蕪村」「池大雅」「浦上玉堂」「円山応挙研究」など。1997年国華賞、日本学士院賞、2000年フンボルト賞、2013年京都市文化功労者受賞。